The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「河北新報」のなかの『パンドラの匣』
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	太宰治スタディーズ. 2014, 5, p. 152-165
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97205
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「河北新報」のなかの『パンドラの匣』

斎藤理生

一　問題の所在

太宰治の『パンドラの匣』は、仙台の新聞紙「河北新報」に一九四五年一〇月二二日から一九四六年一月七日まで連載された。従来この小説は、二つの問題を焦点として研究が積み重ねられてきたと言える。成立と改変の問題である。

成立の問題とは、一篇の生成過程が入り組んでいることである。戦時中、愛読者であった木村庄助から送られた日記を元に『雲雀の声』という小説が書かれたが、空襲で原稿が焼失し、残ったゲラを元に戦後に書き直されたのが『パンドラの匣』だという。[1]そのような経緯があるために、戦中から戦後にかけての執筆過程における変化がさまざまに推測されてきた。[2]

一方、改変の問題とは、本文異同が激しいことである。初出から初刊本、さらに再刊本と、二年足らずの間に三つのバージョンが提示された本文に、少なからぬちがいがあるのだ。特に注目されてきたのは、「越後獅子」が天皇について語るくだりの抹消である。

「(前略)日本に於いて今さら昨日の軍閥官僚を攻撃したつて、それはもう自由思想ではない。便乗思想である。真の自由思想家なら、いまこそ何を置いても叫ばなければならぬ事がある。」

「な、なんですか？　何を叫んだらいいのです。」かつぽれは、あわてふためいて質問した。

「わかつてゐるぢやないか。」と言つて、越後獅子はきちんと正座し、「天皇陛下万歳！　この叫びだ。昨日までは古かつた。しかし、今日に於いては最も新しい自由思想だ。十年前の自由と、今日の自由とその内容が違ふとはこの事だ。それはもはや、神秘主義ではない。人間の本然の愛だ。今日の真の自由思想家は、この叫びのもとに死すべきだ。

アメリカは自由の国だと聞いてゐる。必ずや、日本のこの自由の叫びを認めてくれるに違ひない。わしがいま病気で無かつたらなあ、いまこそ二重橋の前に立つて、天皇陛下万歳！を叫びたい。」

（『パンドラの匣』（46）固パン（5）」（「河北新報」一九四五・一二・一〇）→『パンドラの匣』一九四六・六、河北新報社）

「（前略）日本は完全に敗北した。さうして、既に昨日の日本ではない。実に、全く、新しい国が、いま興りつつある。日本の歴史をたづねても、何一つ先例の無かつた現実が、いま眼前に展開してゐる。いままでの、古い思想では、とても、とても。」（『パンドラの匣』一九四七・六、双英書房）

安藤宏は「太宰治・戦中から戦後へ」[3]で、この改変と『斜陽』（「新潮」一九四七・七～一〇）の母が死に至る場面の執筆とが並行していることに、太宰の〈戦後〉の決定的な変化を読みとっている。また、「『パンドラの匣』自筆書き込み本の考察」[4]では「内在的な改変ではなく、外から強いられたものであった可能性」を検証している。つまり先の引用箇所の改変は、占領下における検閲に関わって無視できない問題を孕んでもいるのだ。

しかし、この戦中・戦後という時代に左右された作品は、その成立と改変については分析が進む一方で、最初に発表された敗戦直後という時代との結びつきは長く見過ごされてきたように思われる。すなわち、刻々と変わる一九四〇年代の政治社会状況に翻弄された小説の考察において、初出時に当たる一九四五―四六年との具体的な関わりは盲点となってきたうらみがあるのだ。

それに対して、近年発表された大原祐治「〈戦後〉の始め方――太宰治『パンドラの匣』論」[5]は、敗戦直後の言論空間を踏まえて一篇を捉え直している点で、研究史の空白を埋めるものであった。ただし本論では、分析の範囲を限定し、発表媒体である新聞との関係を掘り下げる。奥野健男は「『パンドラの匣』が連載されはじめたのは、敗戦から二カ月しか経っていない、未曾有の混乱期、激動期であった。政情は占領軍の意向によって刻々に変り、日本人の思想や心情は、敗戦による挫折、屈辱、不安、平和へのよろこび、希望などの間を矛盾をはらみながら大きく、かつ微妙に揺れ動いていた。こういう時期に、毎日毎日少しずつ新聞に発表され、あともどりも訂正もきかない、新聞連載小説を書くということは、大変な勇気と自信を要することであった」と述べていた。[6]そうした敗戦直後の新聞のなかに置き直すことで、この小説の現在では見えにくくなった面に光を当てたい。（なお、以下の本文において「河北新報」からの引用はすべて一九四五年八月から一九四六年一月の間から行い、各記事が掲載された新聞の発行日は月日のみを記している。）

二　連載当時の「河北新報」

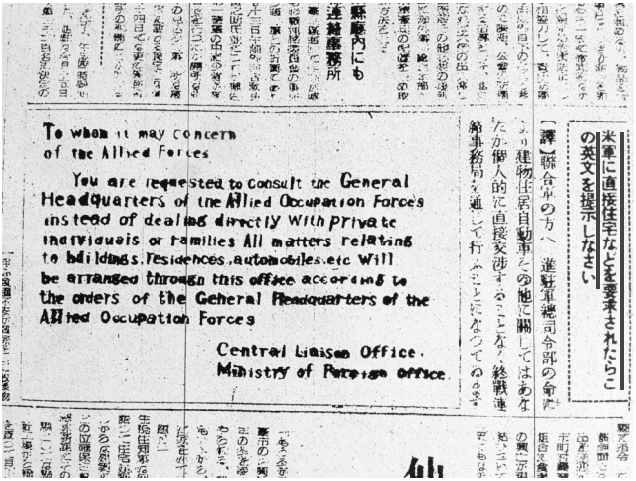
二・一　創作欄と他の記事との接点

新聞の創作欄に発表された小説と、単行本や雑誌に発表された小説とでは、いくつかの点で異なる読まれ方をするはずである。その差異のひとつに、前者は、新聞の他の記事と同じ平面で読者の目に触れるということがある。鶴見俊輔は「同時代の新聞の紙面全体と新聞小説の内容は、微妙な仕方でたがいにまざりあって、和音をつくりだす。だから、同時代の新聞紙面からひきはなされると、あれほどいきいきとしていた物語が急に色あせて見えてくる」と述べている。[7]『パンドラの匣』も改めて「河北新報」で読み直すと、作品内容と紙面の他の記事との間に複数の接点が認められる。

たとえば「口紅（1）」（一二・一一）では、進駐軍に対する女性たちの装いが話題になる。「婦人に参政権を与へられたるは慶賀に堪へざるも、このごろの当道場に於ける助手たちの厚化粧は見るに忍びざるものあり、かくては、参政権も泣きます、仄聞するに、アメリカ進駐軍も、口紅毒々しき婦人を以て、プロステチユウトと誤断すといふ、まさに、さもあるべし、これはひとり当道場の不名誉たるのみならず、ひいては日本婦人全体の恥辱なり云々」という回覧板が発行されるのである。実は連載直前の紙面でも、同じようなことはたびたび話題になっていた。「凜たり大和撫子／軽装や徒らな出歩きは止めよう／新日本再建の母胎たらん」（八・二三）、「服装は端正に／進駐軍に対し毅然たる体面保て」（九・五）といった記事である（「／」は改行を表す。以下同じ）。婦人参政権も「婦人投票如何に」（一二・二五）をはじめとする記事や、投書欄「窓」の「婦人参政権」（一一・二四）など、たびたび取りあげられている。一一月二九日からは「婦人参政・紙上講座」も連載されていた。

あるいは、「固パン（2）」（一二・六）で、「固パン」は「ひばり」に、進駐軍の兵士たちに筆談を申しこむ英文をチェックしてもらう。「固パン」の「見栄坊」な面が滑稽に描かれた場面と言える。ただ、あらかじめ用意した英文を進駐軍に提示することで会話に代えようという試み自体は、連載一ヶ月前の九月一四日の紙面でも推奨されていた（次頁の図版参照）。

もちろん、こうした紙面との接点を作家がどこまで計算していたのかについては、慎重な判断が求められよう。原稿を依頼した河北新報社の村上辰雄は「九月三十日、「作者の言葉」と一緒に、二十回分八十枚近くの「パンドラの匣」が送稿された。（中略）十月十八日、第二回送稿は四十回まで（中略）十一月九日、第三回目の送稿を受けた」と、原稿が一回ずつではなく、まとめて送られてきたことを証言している。[8]ゆえに太宰が「河北新報」の日々の変化に対応するように執筆していたとは考えられない。敗戦直後の地方新聞という条件は同じでも、半年後に織田作之助が京都で行ったような、新聞と小説との密な関わり[9]は、現実的ではなかったのである。


米軍に直接住宅などを要求されたらこの英文を提示しなさい

【譯】聯合軍の方へ　進駐軍總司令部の命令により建物住居自動車その他に關してはあなたか個人的に直接交渉することなく終戰連絡事務局を通じて行ふことになつてゐます

To whom it may concern
of the Allied Forces

You are requested to consult the General Headquarters of the Allied Occupation Forces instead of dealing directly with private individuals or families All matters relating to buildings, residences, automobiles, etc Will be arranged through this office according to the orders of the General Headquarters of the Allied Occupation Forces

Central Liaison Office,
Ministry of Foreign office

縣廳内にも連絡事務所

とはいえ、太宰が紙面や新聞読者を意識していなかったとも考えにくい。村上辰雄宛書簡（一九四五・一一・二一）では「竹さんの顔」は、竹さんが本当は凄い美人なんだといふのを少年が白状するあたり、あのへんで精一ぱい美しい顔をおかきになつたら、効果があると思つてゐた」と記しており、新聞小説に欠かせない挿絵が読みに与える影響を視野に入れていたことがわかる。

また、「越後獅子」の発言が生まれた「嵐の夜の会談」を含む「固パン」の章の手紙は「拝啓。ひどい嵐だつたね」と始まり、「をととひの夜」の話をして、「十月十四日」という日付で終わる（一二・五～一二・一〇）。「河北新報」紙面には、一〇月一二日に「意地悪い台風／けふ辺り回復か」、一三日に「台風一過／農作物の流失は皆無」といった記事がある。作品に「健康道場」の場所は明記されていないのだが、リアルタイムで読んでいた仙台を中心とする地域の読者には、二ヶ月前の台風が自然に想起されたであろう。つまり、単行本や文庫や全集で読む後世の読者には時候の挨拶として素通りされやすい一節は、初出紙面においては作品世界と現実とを同期させる手がかりとして機能していた節があるのだ。

同じ章では、「固パン」が「自由」と「鳩」の逸話を持ち出し、「越後獅子」が「似たやうな名前の男がゐる」と揶揄する場面があるが（一二・九）、その自由主義者・鳩山一郎の記事も、連載前に載っている。「『自由』に基礎／まづ人間の完成必要／真の民主政治／鳩山一郎氏談」（九・二七）などである。また、時の首相による「自由主義」についての発言も、連載中に「自由主義の完成は／個人の責任感から／放縦には仮藉なき制裁／正義・公平に築かん新日本／幣原首相・最悪條件の克服を強調」（一一・二九）という記事になっている。当時の読者が小説を、

これらの記事と無関係に読んだと考える方が不自然であろう。

二・二　天皇制をめぐる議論の渦

連載時の紙面と小説との接点として最も注目されるのは、天皇制をめぐる活発な議論が投書欄や社説に見られた事実である。

たとえば投書欄「窓」には「従来の如き神がかり的なる天皇論より脱却して、真に国民の全てに納得のゆくやうな、しかしてそれが真理として全世界に公示しても、堂々たる天皇論の一日も早く出現する事を望んで止まぬ」（「思想対思想」一二・一四）「終戦後巷間に取沙汰される天皇制論議の余りに感情的にして没論理的なるに驚く」（「余りに感情的」一・五）といった意見が挙がっていた。社説にも「此の際にデモクラシーと君主制との論理的、制度的の関係を徹底的に且忌憚なく究明されたい」（「憲法改正に望む」一〇・二三）「聯合国側の輿論に刺激されて、わが国でも敗戦以来天皇制が盛に論議されてゐるが（中略）それは未だ十分な省察を経てゐるとは見えず、単なる感情論を一歩も出てゐないものさへ発見される」（「天皇制の問題」一・五）といった、議論を促す記述があった。

とりわけ見逃せないのは、「黄口女」による投書「私はかく思ふ」（一二・二九）である。この筆者は「輿論調査で案外天皇制廃止論者の少いのに驚いた、私は一度も天皇制に関してかれこれ言つた事はない、何故なら「参政権よりお米を」の女性同様生活に忙しい方なのだから、しかし輿論はかうだと支持の圧倒的なのを見せつけられると何とかいはずにをられなくなる（中略）自らの力なきを悲しみ賢明ならざりしを恥ぢるならば、与へられた自由参政権を自らのものとして此の際生れかはるべきであらう、その生れかはるのに何よりの障碍物は天皇制ではなからうか」と述べていた。

この意見に反論が相次ぐ。「「私はかく思ふ」と題する去る二十九日付本欄の一女性に質ねたい、貴女は天皇制廃止の圧倒的少数なのを見せられると何とかいはずにをられないといふがその事は果して国民に対する反省の要求か、また共産党員募集の一手段かを聞きたい（中略）我等は民主政治を確立すると共に親子の関係に立つ天皇をどこまでも護持し新日本を再建しようではないか」（「再建に想ふ」一・四）。「十二月二十九日の〝窓〟にて黄口女なる方の御意見を知り女の方であるだけに実に実に意想外に思ひます。（中略）私は日本国民のみは天皇絶対信仰と思つてゐただけに天皇廃止論をいふ人々は「一体どこの馬の骨ならん、一体何人の子供ならん」と激怒を押へかね、幕末の志士の如く一刀の下に切り捨てんと女だてらに思ひましたが、今ではかへつてほゝゑましく安らかな気持で読まれます。云ひたいことを云ひ、運動したいだけ運動し合つて、そこから本当の日本の姿が現れ平和を愛する国であること、そして天皇制であらねばならぬことが理解され、誰もが天皇護持に落着くまで待たうといふ消極的かも知れないけれど自信を持つことが出来たのです」（「君臣一如」一・六）。つまり「黄口女」の投書

が天皇制に関する議論に油を注いだ形になったのである。

「河北新報」の読者には、創作欄における「越後獅子」の意見と、これらの投書や社説とは近く感じられたと推測される。「越後獅子」の言葉は、初刊本や文庫や全集で読むと特別な重みが感じられる。彼は「健康道場」内で一目置かれており、「一座の長老らしく落ちつき払つた態度」で語り、このあと高名な詩人だとわかるからだ。特に全集で読むと、「越後獅子」の意見は『十五年間』（「文化展望」一九四六・四）に引用されるし、『苦悩の年鑑』（「新文藝」一九四六・六）や堤重久宛書簡（一九四六・一・二五）ともつながって、作家の思いが濃厚に反映されている印象が強まる。ところが初出で読むと、「越後獅子」の意見はさほど特別ではなく、紙面の多くの天皇にまつわる言説のひとつのように映るのである。

二・三　「自由思想」と天皇

他の天皇にまつわる言説と比較したとき、「越後獅子」の主張は、「自由思想」と結びついている点に特色を持つ。逆に言えば、「天皇陛下万歳！」が「自由」な叫びであるためには、天皇を否定する「便乗思想」が跋扈しているという前提が不可欠である。たとえば『苦悩の年鑑』では「天皇の悪口を言ふものが激増して来た。しかし、さうなつて見ると私は、これまでどんなに深く天皇を愛して来たのかを知つた。私は、保守派を友人たちに宣言した」と書かれている。

むろん実際の作家の周辺が、そのような言説に溢れていた可能性はある。「河北新報」にも「天皇も戦争犯／中国で指名説」（一一・一〇）「天皇を戦犯法廷へ／弁護士会米大統領に要請」（一二・二三）といった報道があった。連載中の社説には「終戦以来、我が思想界は、俄然色彩を一変し（中略）宛も大正八、九年のマルクス主義華かなりし当時の言論界の再現である」として「現下、民主主義体制、憲法改正、天皇制の論議に於ても、又もや同様の思想的暴力の徴候が現はれ始めてゐる」（「思想の暴力を警戒せよ」一一・九）という見方もあった。連載終了後の社説だが、「天皇制の存続が公然論議の対象となるとは驚くべき時勢の変化であるが、最近になつて、それは従来口にするを憚られた微妙な徹底したところにまで及んで来た様である」（「天皇制論議」一・一五）と書かれることさえあった。

だが全体として「河北新報」では天皇に肯定的な言説が優勢であった。「天皇を廃して一体如何なる統帥を立てようといふのか全く理解に苦しむ」とする投書「天皇制の問題」（一・一六）をはじめ、社説「民主主義の問題」（一一・一七）でも「現在のところ国民の間には天皇制支持の感情が有力であり、日本は日本的民主主義を確立すべきであるといふ主張がその定型をなしてゐる」とされていた。先に触れた社説でも「多数の見解は程度の差はあれ一応天皇制の維持に傾いてゐる」（「天皇制の問題」）「衆議院中心の民主主義が実現し、民心が天皇を国家のために統治を掌る一個の機関であることを納得するに至つたな

らば、天皇制の問題は特別の論議を須ひずとも自ら落着くべき所に落着くであらう」（「天皇制論議」）とされていた。

だからこそ「昨日までは古かつた」叫びが「今日に於いては最も新しい自由思想」になるという「越後獅子」の論理は成り立ちにくく、ただ「天皇陛下万歳」という言葉だけが前景化する。結果、他の天皇を肯定的に捉える言説と見分けがたくなっているのである。

「ひばり」は続く「口紅（1）」で、「越後獅子こそ、当代まれに見る大政治家で、或ひは有名な偉い先生なのかも知れない」という「君の御意見」に対して、「いまはかへつて、このやうな巷間無名の民衆たちが、正論を吐いてゐる時代」だと反駁している。小説としては、この後「越後獅子」が「無名」とは対極の存在だとわかるので、「君」が正しかったことになる。だが初出で読むと、「ひばり」の言うとおり、「越後獅子」と「無名の民衆たち」がよく似た意見を述べているように、日を追うごとに感じられていくのである。

三　浮遊する「ひばり」

三・一　手紙と紙面との齟齬

では、このような接点を含む初出紙面を文脈として読み直すと、全体として『パンドラの匣』はどのような貌を際立たせるのだろうか。ここで改めて一篇の構成を確認したい。

連載は全六四回。それが一三章に分けられている。すなわち、小柴利助こと「ひばり」が友人の「君」に送った一三通の手紙である。太宰治はこの形式について次のように述べている。

この小説は、「健康道場」と称する或る療養所で病ひと闘つてゐる二十歳の男の子から、その親友に宛てた手紙の形式になつてゐる。手紙の形式の小説は、これまでの新聞小説には前例が少かつたのではなからうかと思はれる。だから、読者も、はじめの四、五回は少し勝手が違つてまごつくかも知れないが、しかし、手紙の形式はまた、現実感が濃いので、昔から外国に於いても日本に於いても、多くの作者に依つて試みられて来たものである。（「次の小説予告／作者の言葉」一〇・二〇）

「手紙の形式」は、「ひばり」の語りに「現実感」を出すための手だてであったことがわかる。しかし「河北新報」に置き直したとき目に付くのは、その「現実感」が、紙面全体に映し出されている世の実態からは乖離していることである。

前章二節では、連載当時の「河北新報」では天皇制への肯定否定がかまびすしかったことを述べた。が、実は、投書欄で最も多かったのは食糧問題に関することであった。「参政権より米／当局の無為無策に痛憤」（一一・七）では、次のように述べられている。

戦争に引きずられて来た食生活の貧困は日毎に悪化の一途を辿り遂に恐るべき国民の栄養失調を来すに至つた、この食糧問題に対する巷の声は悲痛であり切実である、わけても戦災都市仙台市民が如何に悲惨な飢餓線上を彷徨してゐるかといふことは、連日の「窓」欄に掲載される投書が圧倒的に多いことによつても明確に証左されるところである

当時の紙面には、就職難、住宅難、燃料不足、汽車の混雑など、他にもさまざまな苦難が掲載されている。だが殊に食糧難に関しては、投書「空腹の嘆き」（一一・二）「下宿と空腹」（一一・三）「頬冠りするな」（一一・一三）「米供出の癌」（一一・一五）「米交換日記」（一一・一六）、社説「綜合的食生活を考へよ」（一一・六）、報道記事「食糧事情を反映／『午前授業』の実情視く」（一〇・二六）「何時まで続くか、米なし配給日」（一一・七）「医薬より先づ食糧／病人のほとんどが結核や脚気」（一一・二七）「国民は餓死する／投書にみる国民食生活」（一二・一九）など、枚挙に暇がないほどである。先に引用した「次の小説予告」と同じ面にも、「東北の食糧事情」という「食糧事情は緊迫するばかり」の現況において「東北各県ともこの窮状をどう打開しようとしてゐるか」について報じた記事が載っていた。

ところが、このように紙面を埋め尽くす食糧難に関する話題が、小説にはほとんど出てこない。「死生（2）～（3）」（一一・四～五）に、「ひばり」が昼食をじっくりと咀嚼する場面が描かれている程度である。しかもこの場面とて、「竹さん」がお櫃に多めに入れたご飯を「ひばり」は残すため、食糧難とは隔たった逸話となっている。先述した一〇月の「嵐」も、報道では農作物への影響が懸念されていたのだが、「ひばり」はそのような危機に思い至らない。

むろん作者も、こうした紙面との齟齬は織りこみ済みであったと推測される。新聞という不特定多数の人に向けて言葉を綴るメディアにおいて、「君」という個人に向けた私的な手紙を、読者が「少し勝手が違つてまごつく」ことを予想しながらも綴っているからだ。紙面全体でさまざまな難題が報じられる時期に、創作欄では明朗な語りを展開する。そうした齟齬を作り出すことで、「パンドラの匣」が開いてしまったかのように苦難が溢れる敗戦後の紙面において、この小説によって「希望」を示すねらいがあったのではないか。

そして、たとえば日比野士朗が投書「一つの提案」で、「いくら食糧の問題が深刻だからと言つて、精神まで挫けてしまつてはなるまい。この際、町や村の心ある人々が集まつて、文化会とか、読書会とかいふものでも結成し、親睦と研鑽とを兼ねて、一つ元気にやつてみるのはどうか」（一〇・二五）と訴え、それに「賛成」する投書も掲載されていた（「民衆と新文化」一一・一二）紙面において、現実の困難を感じさせない「ひばり」の語りが一服の清涼剤になった可能性はある。

ただ一方で、前章で見たように、創作欄は紙面の他の記事と

切り離されているわけではなく、接点を持っている。それも「ふだんの太宰なら照れて決して言わない、反逆的であるがままの時代思潮的、政治的な言葉にあふれている」（奥野健男前掲論）以上、他の記事と比較して読まれることは避けられなかったはずである。

天皇に関する議論は、作品内では「越後獅子」の意見が共有されているようである。だが紙面では、議論は連載終了後も続く。たとえば一月二五日には「天皇制／是か非か／各派各党の論議活発」という記事があり、「日本国民は民主主義的な天皇制を存続せしむべきかどうか、また存続しせめる場合はその天皇制は如何なる内容をもつべきものであるかを自らの判断によつて決せねばならない」と書かれている。また、「天皇制は是か非か／資本主義か社会主義か／国民総審判の日来る／三月三十一日」（一・三一）では「天皇制問題」は「全般的な憲法改正の方向に対する論議と相俟つて総選挙の最も重要な標題となつた」と書かれている。

なるほど一月二五日の同じ紙面には、輿論調査研究所の調べで「天皇制支持」が「全体の九十二パーセントを占め（中略）道義的中心として認めるものが一番多かつた」ことを報じる記事「道義的に支持／輿論調査結果判る」が掲載されており、輿論の大勢は明らかであった。それでも当時の「河北新報」には、廃止論までには至らないものの、この機会に天皇制を再考しようと促す言説が散見される。社説「天皇制と民主主義的革命」（一・一六）「家族的国家の究明」（一・二六）「天皇制論議の整理」（一・二八）、投書「共産主義問答」（一・二七）などである。投書欄での議論を活性化した「黄口女」も再登場し、「我が心は骨董品的天皇の存在を許さない。真の人民による人民のための政治形態をもとめる」「共産党ではない、而し皆で彼等のいふことも聞かう。そしてよりよきものを見出して行きたいのです」と述べた（「天皇の存在」一・二二）。

「越後獅子」の発言に関しては、連載中の紙面に、社会学者の新明正道による「婦人参政講座【29】自由主義【下】」（一二・二八）という記事があることも無視できない。新明はそこで「自由主義」を次のように解説している。

> 自由主義は精神的自由と政治的自由については一応民主主義を徹底させることが出来たが、経済的自由については資本的市民的自由のみを要求するに止まつたものであつて、これに対して経済的にも平等主義を徹底せしめようとする新たな民主主義が成立するにいたつた。（中略）今日において民主主義の実現をぬきにしては民主主義が空虚と成るものと観念してをり、これを欠如した自由主義をもつて新世紀を指導することは出来ないものと見てゐる。（中略）我々は事態かくの如くである以上、急速に自由主義の立ち遅れを一応取り返さなくてはならないが、これは民主主義実現の

第一段階をなすだけである。我々は今日における民主主義が歴史的な自由主義の限界を越えて経済的社会的民主主義の実現をも要求しつゝあることを認識しなければならないのである。

むろん「固パン」や「越後獅子」の発言が直接的に否定されているわけではない。だが「歴史的な自由主義の限界」を見据えた新明の論述に、「嵐の夜の会談」には欠けている視点が含まれていることは間違いない。初出紙面には、「ひばり」たちにとって大きな意味を持っていた「会談」を相対化する言説が隣接していたのである。

三・二　浮きあがる語り

もちろん新聞小説は、紙面の他の記事と切り離して読まれることもありうる。が、仮に創作欄だけを読んだとしても、「ひばり」の手紙には相対化される部分が少なくない。[10]

たとえば「新しい男」である。一篇において彼は頻繁に「古い」「新しい」を区別し、自分を「新しい男」とする。しかしその実態は曖昧である。石井知子「太宰治『パンドラの匣』論――新しい人間像の模索――」[11]では、「作中、非常に多く登場する「新しい男」という言葉だが、実は本当に「新しい男」とはどんな人物なのかは明確に表現されていない。その理由として考えられるのはひばり自身にも何が「新しい男」なのか本当はわかっていないということだろう。ひばりはそれを模索し気負っている状態なのだ」と指摘されている。なるほど「ひばり」はこの言葉を思い思いのときに定義している。

・僕は、マア坊の事は、きれいにあきらめるつもりだ。新しい男は、思ひ切りがいいものだ。未練なんて感情は、新しい男には無いんだ。（「死生（2）」一一・四）

・新しい男には死生に関する感傷は無いんだ。（「死生（4）」一一・六）

・あたらしい男は、女に対してちつとも自惚れてゐないのだ。（「マア坊（2）」一一・八）

・あやまちを改むるにはばかる事なかれだ。新しい男は、出直すのも早いんだ。（「妹（3）」一一・一三）

「僕は、まつたく違ふ男になつてしまつた筈ではなかつたか。僕は、あたらしい男になつてゐたのだ」という「死生（1）」（一一・三）の言葉からも明らかなように、望ましい姿をそのつど「新しい男」として立ちあげて、そこに自分を当てはめてゆく。それが「ひばり」の方法である。しかも最終的には、「今こそ僕は告白する。僕は竹さんに、恋してゐたのだ。古いも新しいもありやしない」（「竹さん（3）」（一・四）だの、「僕は今まで、自分を新しい男だ新しい男だと、少し宣伝しすぎたやうだ」「新しい男の看板は、この辺で、いさぎよく撤回しよう」（「竹

さん（6）」一・七）だのと、自ら「新しい男」という観念から距離を取るのである。

この小説には、他にも「ひばり」の言葉を突き放し、見直させる視座が仕組まれている。「つくし」の愚かな手紙は、「ひばり」の手紙の戯画と捉えられる。「あんないい人が、こんな滅茶苦茶な手紙を書くのだから、実際、この世の中には不思議な事があるものだ」（「妹（4）」一一・二五）と「ひばり」が述べているように、「つくし」の手紙は、手紙の文面と実際の書き手との距離を示している。そうした内容が、まさに手紙に内在している構造に注目したい。「ひばり」は「つくし」の手紙を引用し終えた後「どうもこの偉大なる書翰を書き写したら、妙に手首がだるくなつて、字がうまく書けなくなつて」しまう。それは類似性を半ば自覚したからではないか。

また、「かつぽれ」の語りも注目される。「固パン」や「白鳥の間」の面々への発言からわかるように、彼は「支離滅裂」に「一ばんいい事」だけを前面に出し、「同じ様な事ばかり繰り返」す。「ひばり」はそうした彼の語りを離れて聞いているようである。だが両者は似ていないだろうか。「かつぽれ」の語りは、「ひばり」の語りも「新しい男」だの「かるみ」だのと「いいところ」取りになって、軽佻浮薄に流れている可能性を示唆しているのではないか。

磯貝英夫前掲論では、『パンドラの匣』には「物語部分の生彩と思想的饒舌の空虚とが同居する」ことが指摘されていた。紙面から浮くことを意図された語りに、やや浮き過ぎる面があること。終盤の「花宵先生（7）」（一二・三一）で唐突にもたらされる、「羽衣のやうに軽くて、しかも白砂の上を浅くさらさら走り流れる小川のやうに清冽」でありながら「断じて軽薄と違ふ」という「かるみ」という観念は、主人公「ひばり」にとって新たな指針であるだけでなく、語り手「ひばり」にとって、自身の言葉が調子よく浮いてしまいがちであることを積極的に捉え直せる視座でもあったはずだ。

ところが語り手「ひばり」は、「かるみ」という言葉さえ不用意に使う。「竹さん（3）」で「マア坊」の彼への思いがあふれ出かけたとき、「ひばり」は「意味が無い」とくり返す。彼は「マア坊」の涙も、自分の言葉も、握手も意味がないと言う。すると「マア坊」も、直後の彼の「てれかくし」の発言を「いいえ」と拒み、寡黙になる。「ひばり」はそのような彼女を「あたらしい美しさ」「永遠の処女」そして「かるみ」と意味づけ、「僕たちの仲間」だとか「いまの女のひとの顔には皆一様」の表情が見えるなどと一般化する。だがそうした発言は、手紙で「君」に一方的に発せられるばかりで、「マア坊」には共有されない。そのため、「かるみ」は「ひばり」にとって都合よく使われる言葉にも見えてしまうのだ。[12]

もちろん彼が次のように書き記していることは無視できない。

僕のこれまでの手紙を見て、君はきつと、この日本の悲憤と反省と憂鬱の時期に、僕の周囲の空気だけが、あまりにのんきで明るすぎる事を、不謹慎のやうに感じたに違ひない。それは無理もない事だ。しかし、僕だつて阿呆ではない。

朝から晩まで、ただ、げたくた笑つて暮してゐるわけではない。それは、あたり前の事だ。毎夜、八時半の報告の時間には、さまざまのニユウスを聞かされる。黙つて毛布をかぶつて寝ても、眠られない夜がある。しかし僕は、いまはそんなわかり切つた事はいつさい君に語りたくないのだ。僕たちは結核患者だ。今夜にも急に喀血して、鳴沢さんのやうになるかも知れない人たちばかりなのだ。（「死生（4）」）

手紙で主に明るい内容が書かれているからといって、「ひばり」が幸福に暮らしているわけではないのだ。また、彼は「竹さん」への想いを最後まで隠していた、信用できない語り手でもある。表面の言葉だけから「ひばり」を評価することは不当であろう。

とはいえ、新聞連載という形式上、作中の一部で語りの背後を読むことが促されるからといって、その構造は、連載を通しては意識されづらいはずだ。そもそも読者にとって、連載を読み続けること自体が簡単ではなかった。当時、仙台近郊に疎開していた林富士馬は「配達される新聞に、太宰さんが小説を連載しているのを知った」が、「新聞を毎日読むことができなかった」と証言している。[13] 当時の投書欄でも「当町における近頃の新聞配達ほど不規則で不正確なものはないやうに思はれる、一日配達すれば翌日には配達がない、寧ろ毎日配達されよう等とは当地においては望み得ない」とあり、新聞社の「係り」は「この種の投書数通あり」と断っている（「旧聞の新聞」一一・二七）。新聞の継続的な入手が難しかったことは、「新聞の配給」「配給所の官僚化」「講読の自由」（いずれも一二・二）でも取りあげられている。そのような読みの環境において、「ひばり」の発言は裏に秘めた深刻さを意識されづらかったと考えられる。

四　沈黙する「ひばり」

「ひばり」は冒頭（「幕ひらく（1）」）で、「あの日以来、僕は何だか、新造の大きい船にでも乗せられてゐるやうな気持だ。この船はいつたいどこへ行くのか。それは僕にもわからない。（中略）ただ新しい大きな船の出迎へを受けて、天の潮路のまにまに素直に進んでゐるといふ具合ひなのだ」と述べていた。その彼が末尾（「竹さん（6）」）では「あとはもう何も言はず、早くもなく、おそくもなく、極めてあたりまへの歩調でまつすぐに歩いて行かう」と述べるに至る。ここには大きな落差がある。石井知子前掲論では「自らの足で歩くという行為を自然に行うこと、他者の依存を抜け出すことも必要だとひばりは気づ

いたとも捉えられる」と指摘されている。

同時に注意したいのが、「何も言はず」という一節である。浮ついた言動を反省し、沈黙すること。こうした部分に一篇の、当時の紙面への批評をうかがうことは可能であろう。

このころ「河北新報」を不定期的にせよ読んでいた林富士馬は前掲論で、「敗戦直後、老若男女、多くの人々が宮城前の玉砂利に、あっちこっち、散り散りに、しゃがみ込むようにして、また、土下座して泣き伏している写真が新聞紙上に掲載されていたのに、やがて進駐軍がやって来ると、たちまち論調が変ったのは判るとしても、いわゆる、知識人とか、文化人だとか、文筆の士が、ひとを押しのけるようにして、「民主主義」「進歩主義」と称するものを唱えて、他人の所業を弾劾し、おのれひとり、戦争の行方を見透していたと、煽動し、啓蒙しはじめたのには、びっくりしてしまった」と記している。実際、大政翼賛会文化部副部長であった日比野士朗は、「新日本建設への道標⑧文学」（八・三〇）において「深い反省」を示しつつ「正直の話、日本の文壇はこゝ数年の間かなり低調だつた」「正直の話、一般読者は戦記ものには食傷した」などと述べていた。また、連載中の『パンドラの匣』の真上に載ることの多かったコラム「みちのく」は、進駐軍の美談をたびたび取りあげていた。「健康道場（5）」（一〇・三〇）の上には「親切な米進駐軍将校をめぐる二つの挿話」が、「死生（4）」の上には「米進駐部隊と東北帝大とにまつはる麗はしい一挿話」が、「衛生について（2）」（一一・一四）の上には「小市民的な視野で進駐軍を迎へた人達も既に朗らかで紳士的なアメリカ人気質にとけこんだと思ひますが私の場合生命の恩人としても進駐軍の人達の親切に無限の感謝を捧げてをります」という「感激話」が載っている。こうした無節操にも見える変化に対しては、当時の紙面にも「新聞には毎日の如く「真相はかうだ」とか「実相はかうだ」とかの見出しで過去の日本及び日本人の旧悪をさらけ出してる（中略）終戦以来四カ月、純真な眼を以て娑婆を見る時世は食糧難、住宅難、就職難の苦悩の底に追ひ込まれてる一般人には幻滅こそ感ずれ何の光明も見出せない（中略）今頃になつて他人のことをあれこれいつてるよりももつと緊急な問題がありさうだ」（一・一八）と批判する投書があった。

「僕はもう昔の小柴ぢやないんだよ。いまはもう、この健康道場に於ける一羽の雲雀なんだ。ピイチクピイチクやかましく囀つて騒いでゐるのさ」（「健康道場（5）」）。このように自己言及する「ひばり」が浮ついた饒舌に流れることは、あらかじめ想定されていたはずである。そして単行本や全集や文庫で読む限り、そうした浮かれた調子は、過渡期における「二十歳の男の子」の手紙に「現実感」を与えることに成功していると見ることもできよう。

しかし新聞小説として読むと、そうした「ひばり」の語りは、その調子のよさにおいて他の記事と通じることにもなる。そのことは、紙面のなかで創作欄だけ浮くことで「希望」を示すね

らいとは齟齬する。当時の作家の思考をうかがう際には無視できない天皇への言及も、談論風発する紙面のなかではあくまで一意見として、連載中も連載後も特に注目されることなく、埋没していった感が否めない。

そうした歪みと、連載が当初の予定よりも早く終わってしまったこととは対応しているだろう。当初、井伏鱒二に宛てて「たのしみながら書いて行かうと思つてゐます」（一九四五・一〇・七）と記していた太宰は、一ヶ月半後には「新聞小説はじめてみたら、思ひのほか面白く無く、百二十回の約束でしたが、六十回でやめるつもりです。（中略）いつの世もジヤーナリズムの軽薄さには呆れます。ドイツといへばドイツ、アメリカといへばアメリカ、何が何やら。」（一九四五・一一・二三）と書くようになるのである。

注（1）　一連の経緯は浅田高明の著作や、山内祥史「解題」（『太宰治全集第七巻』一九九〇・六、筑摩書房）にくわしい。日誌そのものは現在、木村重信編『木村庄助日誌　太宰治『パンドラの匣』の底本』（二〇〇五・一二、編集工房ノア）によって一部を読むことができる。

（2）　饗庭孝男「『パンドラの匣』」（『太宰治論』一九七六・一二、講談社）、磯貝英夫「『パンドラの匣』」（『戦前・戦後の作家と作品』一九八〇・八、明治書院）、島田昭男「『パンドラの匣』」（「解釈と鑑賞」一九八八・六）、石田忠彦「はにかみの闘い――太宰治の戦後」（「敍説Ⅺ」一九九五・一）などを参照されたい。

（3）　「国語と国文学」一九八九・五

（4）　「資料と研究」二〇一〇・三

（5）　「近代文学合同研究会論集」二〇一三・一二

（6）　「『パンドラの匣』について」（『パンドラの匣』一九七二・九、旺文社）

（7）　「新聞小説論（高木健夫氏の『新聞小説史稿』を読んで）」（『限界芸術論』一九六七・一〇、筑摩書房）

（8）　「終戦直後の金木町にて」（「東北文学」一九四八・八）

（9）　拙稿「織田作之助『それでも私は行く』論――「京都日日新聞」を手がかりに――」（「国語と国文学」二〇一二・一〇）を参照されたい。

（10）　「ひばり」の語りの問題については、本誌の滝口明祥「滑稽な〈男〉たちの物語――太宰治『パンドラの匣』」も参照されたい。

（11）　「滝川国文」二〇〇二

（12）　石井知子前掲論では、「ひばり」が「かるみ」を、失恋を自分のなかで処理するために使っている節があることが指摘されている。

（13）　「解説」（『パンドラの匣』一九七二・九、旺文社）。ちなみに菊田義孝の疎開先では、「河北新報」が「七日ぶんずつまとめて配達され」たという（「パンドラの匣」『太宰治と罪の問題』一九六四・一〇、審美社）。